

この人を見よ

中高宗教主事 大久保 直樹

°キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、⁷かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、⁸へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。⁹このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。¹⁰こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、¹¹すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。

フィリピの信徒への手紙 2 章 6-11 節

朝日新聞に平仮名で「ひと」というタイトルで人物を紹介する記事を掲載している欄があります。話題の人、ときの人、ぜひ読者にも知ってもらいたい人、そんな人たちのことが紹介されているコーナーです。お読みになったことのある方も少なくないと思います。今日は初めに、今月 7 月 5 日に掲載されていた、病院の院長をなさっている田中志子(たなか ゆきこ)さんのことをご紹介します。(礼拝では全文引用。ここでは概要と田中氏の言葉の引用にとどめる)

～30 年前、実家の病院で働き始めた頃、認知症入院患者の身体拘束を解いて回ったことへ批判が寄せられた。徐々に理解が深まり、病院の雰囲気が好転した。2002 年に身体拘束はゼロとなった。彼女は言う。「治療とケアを調和させることで患者との信頼関係は深まり、医療従事者にもやりがいを感じられる環境が整う。入院生活が快適になる病院が増えることが目標です」～

お話のタイトルを「この人を見よ」といたしましたので、大久保はこの「田中さんを見よ」ということを言いたいのか、と思われるかも知れませんが、そうではありません。けれどもわたし自身、彼女の生き方・考え方に大変感銘を受け、同時に共感したことはまさに、田中さんの生き方・考え方に心動かされ、人の尊厳が守られるべきこと、守る側も守られる側も共に、心に平安があり、安らぎがあり、そこで憩うことができ、笑顔で過ごすこと、幸せを実感できる空間・時間を作り出すことの尊さを改めて実感させられたのでした。

30 年近く前、わたしの叔母が癌を患い、今と比べればターミナルケアがまだまだ日本では普及していなかったといってもよいと思うのですが、そんなときに、にわかに関連図書を読んだり、実践されている医療者の講演会を聴きにいったりしたことがありま

した。その際に聴いたことのひとつが、ホスピタル「病院」やいわゆる終末期医療を必要とする患者さんが、残された時間を穏やかに過ごせるように、身体的・精神的な苦痛を和らげるためのケアを提供する施設やプログラムを意味する「ホスピス」hospice の語源についてでした。ホスピスの語源は、ラテン語の「hospes(ホスペス)」「(客)」「(主人)」「(訪問客)」または「hospitium(ホスピティウム)」「(客をもてなすこと)」「(宿泊所)」「(宿)」です。どちらも「もてなす」「客人を迎える」といった意味を持ち、そこから派生して、巡礼者や旅行者のための宿泊所、あるいは病人や弱者を保護する場所を指すようになりました。ですので、中世の修道院は巡礼者・旅人を単にもてなす場としてだけではなく、ときに傷病兵などを受け入れる施設としての役割を果たすことになったのでした。この話をしてくださった方は、続けて次のようなことも教えてくださいました。英単語で書くと、hospital や hospice には共通した接頭辞があります。hos の部分です。ここが先ほど申し上げた「もてなしを意味する部分です」と。ですから他に host、hostess、hotel もこれと同類なのです。そして大事なことは、わたしたちは、もてなす側ともてなす側に分けて理解しがちなのですが、つまり、hotel に客として泊まれば、当然客としてもてなされ、快適に過ごすことができる、と。でもそれだけではなく実はもてなす側も客がそのように過ごすことができるように奉仕することを通してまた客がそのように過ごすことができて満足したり、笑顔で快適に過ごす姿を目にしたり、耳にしたり、その場を共有することで幸せになる、そこでは両者ともに平安や安らぎを感じて憩うことができる、そんな意味が本来の在り方、あるいは目指すべきあり方なのだと。

「この人を見よ」。このあと賛美します 280 番の 4 節に示されている通り、「この人」とはもちろんイエス・キリストのことです。神であり人となられたイエス・キリスト。

わたしが個人的にも大好きな賛美歌を選ばせていただきました。大好きな理由のひとつは日本人による作詞、作曲によるものであって、尚且つメロディーが複雑でなく、ずっと入ってくる。イエス・キリストのご生涯をこの 1 節から 4 節の歌詞で本当によく表わしていて、イエス・キリストの生き様を想起することができる、素朴で優しくて、また力強く、キリストの愛と赦しが謳いあげられているからといえるかと思います。

さて、この賛美歌の内容は、まさに本日の礼拝のために用いている箇所、フィリピの信徒への手紙 2 章 6 節から 11 節を歌っていると言えます。今一度お読みします。

⁶キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、
⁷かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、
⁸へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。
⁹このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。¹⁰こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、
¹¹すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。

特に注目したいのは、6 節～8 節です。

⁶キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、
⁷かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿
で現れ、⁸へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。

ともすれば、わたし自身、固執してしまいます。悪い意味で自分自身に。つまり自己中心的になる弱さがあります。それが高じるとやがて、周りが見えなくなり、他者を思い遣ることができなくなり、共に生きようとしなくなってしまいます。また人と人との繋がりで生きる時に、その人を見ているようで見ていない、その人を、その繋がり中でどのような存在として、また繋がりの中にいる一人ひとりをその共同体の中のどのようなメンバーとして共に歩むのかということを心に留めて歩むことができているのかということは、わたしたちにとって本当に大きな、そして根幹的な課題であると思いますし、その課題は、キリスト教学校における使命 mission であると考えています。以前ある同窓生の方から言われました。「先生、人だよ人、学校は人だよ」。また別の外部の方からも「やはり人ですよ。学校というところは…」この「人」が繋がるキリスト教学校の土台は、イエス・キリストという神であり人です。イエス・キリストの言葉とわざに倣って歩む・生きる学校がわたしたち宮城学院なのです。この世的な様々な困難、課題があります。迷うとき、苦しむとき、立ち止まって心から祈って、神に、主イエス・キリストに尋ね求め、委ねる祈りをし、主イエスの言葉とわざに倣う歩みをなしていく私たちであり続けたいと思います。

(2025 年 7 月 15 日)